

教育的価値	具 体 の 項 目	教育課程
1 【いきる】	②【自然との共存】 自然の恵みや美しさに感動する心と畏敬の念をもち、自然と共に生きることについて考える。	総合的な学習の時間

【題材】牡蠣の養殖体験（「牡蠣講話」・「牡蠣種付け体験学習」）

○目的

- （１）牡蠣の養殖体験を通して、地域の産業を理解し、その仕事に携わる人が持つ誇りや思いを学び、ふるさとへの愛と自分の進路や生き方について考えるきっかけとする。
- （２）２年生の収穫祭（平成２８年２月末）まで継続した総合学習の活動として位置付ける。
- （３）復興教育の観点から、地域へのメッセージを込めた時間とする。

【対象】

第１学年（男子２２名、女子３１名、計５３名）

【実践の概要】

牡蠣の養殖体験は、平成９年度から始まり、今年で１７年目を迎えた事業である。（平成２５年度の本校開校にあたり、統合された３中学校の一つである「米崎中学校」の事業）開始当初より、牡蠣の養殖業を営む大和田氏を講師として招いて進められ、震災の年も筏を新たに作成するなどの対応をとりながら、途切れることなく体験活動を継続させてきている。本校の生徒は、比較的海の近隣に居住しているものの、漁業に関心が高くない生徒や乗船したことがない生徒、牡蠣がどのように養殖されているか知らない生徒は少なくない。本体験は、生徒にとって地元の漁業の実態を詳しく知ることができるだけでなく、自然を愛し誇りと希望をもって生きている社会人と関わることができる貴重な体験となっている。

（１）牡蠣講話期日

平成２６年５月２２日（木）３～４校時

<場所：体育館>

牡蠣の種付け期日

平成２６年５月２３日（金）１～４校時

<場所：脇ノ沢漁港>

（２）講師：大和田 晴男 氏、大和田 武也 氏



《東海新報 平成 26 年 5 月 24 日（土）より》



【授業の展開】

- (1) 地元の産業に関するガイダンスを実施し、第1次産業に目を向けさせる。
- (2) 「牡蠣講話」により、牡蠣養殖に関わる人の工夫や誇りを知り、関心を高めさせる。
- (3) 「牡蠣の種付け体験」(直接体験)により、牡蠣がどのように種付け・養殖されているかを深く知る機会を設定するとともに、震災を乗り越え夢をもって強く生きている人の素晴らしさに気づかせる。
- (4) 体験したことを個人新聞にまとめさせる。
- (5) 文化祭で個人新聞を展示し、地域の方々へ学んだことや地元産業への思い、自分の将来について考えたことを発信させる。



<生徒の感想①>・・・牡蠣講話から

海の仕事をしている人が、たくさんの仕事を効率よく進めていることを聞いて、難しい作業なんだということを知りました。そして、海の仕事をすることとは、自然に起こることを予想して行わなければならないということを知りました。養殖をしていて楽しかったことなどを聞いて、おもしろそうな仕事だなと思いました。

<生徒の感想②>・・・牡蠣の種付け体験から

牡蠣の種を付ける紐を開くのが一番大変でした。紐がけっこう固くてすぐに腕が痛くなりました。12個付け終わった後、軍手の中が暑くなり、明日筋肉痛になると思うくらいでした。牡蠣などの海産物は、海で働く人たちの苦勞やがんばりがあってのものなので、大事に美味しく食べようと思いました。

◎まとめ

- ・「牡蠣講話」「牡蠣の種付け体験学習」は、地元の漁業についての理解を深めるとともに、身近な自然がもつすばらしさに気づく機会となった。
- ・震災後に多くの困難を乗り越え復興に向けて力強く生きている大和田氏の話を知ったり、故郷を愛し誇りをもって仕事をしている姿を直接見ることで、自分自身の今後の生き方を考えるよい与える機会となった。
- ・震災で全ての筏を流失したが、全国のボランティアの協力で作られたことを大和田氏から聞き、人と人の絆や繋がりについて考えるきっかけとなった。
- ・復興教育を推進するにあたり、今後も地域人材や郷土素材を有効活用しながら推進していきたい。

『講師:大和田氏から』

「どの仕事も世の中に無くてはならない仕事ばかりであり、大切な仕事ばかりであることに気づいてほしいと思いつつ、子どもたちに話したり、牡蠣の仕事を体験してもらいました。陸前高田は、雪も少なく海も山も自然が豊かでありであり、美味しいものが沢山食べられる地域ですので、故郷をいつまでも大切にするとともに、この地で生まれ育ったことに誇りをもってほしいと思っています。震災後、暗くばかりしていられますので、子どもたちには明るく生きてほしいと思っています。」